

Culture in Psychiatry



C
CINEMA

世界で初めて「女性」になった男性と、 その「妻」の物語

—リリーのすべて—

小澤 寛樹 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科精神神経科学教授

長年連れ添ったパートナーから（「長年」という言葉の定義は各人に委ねますが）、突然の別れを切り出されるというのは大変に辛いものです。私にも若干の覚えがあります。これが嫌いになったからだとか、別に好きな人ができたからという理由であれば、その時はつらくてもやがて時間が解決してくれることでしょう。ですが、これが「自分の性別が違っていたから」という理由だとしたらどうでしょう。ショックの大きさを数値化し比較するのはナンセンスかもしれませんが、知った際に受ける衝撃は計り知れないものがあると思います。そういった意味で、今回取り上げる映画『リリーのすべて』は、世界初の性別適合手術（sex reassignment surgery；SRS）を受けることを決めたリリー・エルベの映画であると同時に、リリーにその決意を告げられてからも彼女を支え続けた妻ゲルダの物語でもあります。

この作品の原題はThe Danish Girl。2010年の映画『英国王のスピーチ』で第83回アカデミー監督賞に輝いたトム・フーパーがメガホンを取った、1930年に世界で初めてSRSを受けたデンマーク

人画家リリー・エルベの人生を元に作られた映画です。

のちにリリー・エルベとなる風景画家アイナー・ヴェイナーは同じく画家である妻ゲルダに女性モデルの代役を頼まれます。ストッキングを身につけ女性用の美しい繊細な靴を履くことで、アイナーは自分の中の女性に気づきます。ゲルダはちょっとした「ゲーム」のつもりでしたが、アイナーにとっては違いました。それ以来アイナーはリリーという女性として暮らす時間が徐々に多くなっていき、自分の心と体の不一致に悩むようになります。妻ゲルダは戸惑いながらもリリーとして生きようとする夫を支えますが、リリーは人々の好奇の目に晒され、見知らぬ男達からの暴力を受けてしまいます。また、何人もの医師の診察を受けますが、リリーの存在を認めようとする医師はいませんでした。このような体験を経て、次第にリリーは世界で初めてのSRSを受けることを決意するようになります。

リリーを演じたエディ・レッドメインは『博士と彼女のセオリー』のホーキング博士役で第87回アカデミー主演男優賞を受賞し、いま最も注目されるイギリス

人俳優といっても過言ではありません。妻ゲルダを演じたアリシア・ヴィキャンデルはこの役で第88回アカデミー助演女優賞を受賞しました。女性となることを渴望し、懸命に生きようとするリリーと愛する夫を日々失いつつある悲しみとそれを超えてなお夫を支えるゲルダの姿を今が旬の俳優2人が熱演しました。

みなさんも人生の中でいくつかの役割をお持ちでしょう。親や子、夫や妻といった家族的な役割もあれば、経営者や従業員、医師や看護師といった職業的な役割もあります。演劇においては王様には王様らしい衣装や振る舞いが求められ、道化には道化らしさが求められるのと同様に、私たちが自分の役割に見合った行動や外見を求められ、そして私たちのほうでも、意識的あるいは無意識的に自分に与えられた役割に沿うように振る舞っているとされています。もちろん誰かの伴侶や親になることを選択しないという生き方もあるでしょう。また、いったん白衣を脱いでしまえば、医療従事者としての役割は終了します。しかし、ただ1つ自分で選ぶことなく生まれる際に与えられ、生涯終わることのない役割が